



当事者参画のユニバーサルデザイン 対話から成し遂げた国立競技場

編集 / 高橋儀平
著 / 高橋儀平、佐藤克志、川野久雄、
古田安人、墓田京平、草ヶ谷友則

A5判・240ページ
価 格 / 3,740円
発行日 / 2025年5月
発 行 / 彰国社

2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックのメイン会場となった新国立競技場については、ザハ・ハディド氏による当初案が建設費高騰などの理由で白紙撤回となり、その後のコンペを経て、大成建設・梓設計・隈研吾建築都市設計事務所共同企業体（以下、JV）による現在の国立競技場が建設されたことは記憶に新しい。しかしその騒動の裏側で、本書の編・著者である高橋儀平東洋大学名誉教授はじめアドバイザーとJVのUD（ユニバーサルデザイン）チームが、この競技場を「世界最高のユニバーサルデザイン」を目指し奮闘していたことを知る人は多くない。不勉強ながら、私もその一人であった。

UDチームの最若手であった墓田京平氏（梓設計）は、自身の役割を「プロジェクト全体の伝書鳩のような役割であった」としながらも、「良い経験だったという言葉では片づけられないほど濃厚な6年間だった」と語る。建築は、その建築を使うユーザーのために存在するにも関わらず、設計者にとっては「まだまだユニバーサルデザインの優先順位やノウハウが高くはない」と指摘する。

本書では、このプロジェクトが「世界最高のユニバーサルデザイン」を目指したプロセスが詳細に描かれる。そのポイントは二つある。一つ目は「国際パラリンピック委員会アクセシビリティガイド（IPCガイド）」の存在である。IPCガイドの功績は、各国でばらばらだったアクセシビリティ関連の法律や設計基準を共通のものとしたことである。IPCガイドに基づくオリパラ施設の整備は、大会後のレガシーを含め、世界の都市のアクセシビリティに各段の進歩をもたらしてきた。

しかしIPCは「（先進国であっても）アクセシビリティは未だ不十分」と指摘する。日本のバリアフリー法策定を牽引してきた高橋儀平氏は次のように語る。「（わが国のバリアフリーは）1990年代後半には高齢社会へのスピードと並行して急速に整備され、アジアをはじめ諸外国の先頭集団に位置すると認識していたのである。ところがIPCのこの記述を目にして愕然とし我に返った。確かにそのとおりなのである」。そして東京2020大会では、IPCガイドを満足する「Tokyo 2020 アクセシビリティ・ガイドライン」が策定された。

もう一つのポイントは、「障害当事者と専門家の共同によるUDワークショップ」である。IPCガイドのようなハイレベルのアクセシビリティ基準があったとしても、設計者による対応には限界がある。様々な要素（法・コスト・技術・デザイン・サステナビリティなど）を考慮しなければならない設計者という職能にとって、基準は「守っておけばよい」ものとなりがちである。逆に障害

当事者との対話における「多様なユーザーの多様なニーズ」は、設計をより良いものとしていくためのアイデアの宝庫になり得る。

しかしそのプロセスは必ずしも容易ではない。先の墓田氏は言う。「（ワークショップでの意見を）ひとつひとつをうやむやにせず、要望の背後にある意図を丁寧に確認し、設計図書へ盛り込んでいく作業が繰り返された。オフィシャルには21回というUDワークショップを実施したことになっているが、背後にあった調整や打合せも入れると100回は超えていたと思う」。こうした難路を経て、IPCガイドというベースの上に、UDワークショップによる設計改善活動を繰り返すことで、国立競技場プロジェクトは更なる高みを目指していったのである。

日本のバリアフリーの土台が形成された1964年東京パラリンピック時の記録が残されていないことが、本書出版の出発であったと高橋儀平氏は言う。「（本書刊行の動機は）国立競技場の整備事業で実現したUDワークショップの記録を後世に正しく残すことであった。竣工から5年目を迎え、いささか記録公開が遅くなった感はあるが、これほど真摯に障害当事者、設計者、事業者、発注者が向き合ったケースは編者の経験でも少ない」。本格的な高齢化・多様化を迎える日本にとって、UDはラストアイテムであり、本書はその最前線を知る格好の一冊となっている。

（評者／似内志朗）